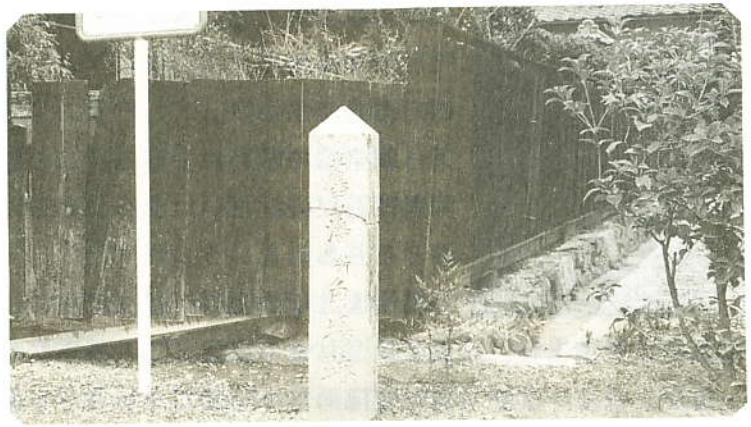
岐山の遺跡、史跡、名所、旧跡



旧藩新角場跡

角場というのは、射撃の練習場（試し撃をする所）のことである。江戸時代に徳山藩では、元禄から享保にかけては銃器は軍制上、足軽の所用とされ武士はその技を修めなかった。

文化７年（１８１０年）に中島流の砲術を起こして、稽古料として毎年銀２００匁（７５０ｇ）あてを修業者に支給した。

当分のあいだ的場を設けなかったが、弘化４年（１８４７年）三番丁に射的場を設け中島流砲術の稽古を開始した。

その後、この射的場が狭く不便となったので、安政３年（１８５６年）に舞車のこの地（現清水町１－３６）に移転した。ここでは中島流砲術師範、羽仁三郎太夫に西洋流砲術師範も兼ねさせ、幕末まで角場として使用された。なお、砲術では棟居竜洞・中川半平・羽仁一夢斉・福間十兵衛らが有名で、兼崎橙堂は西洋砲術に通じていたといわれている。

西一ノ井手古墳跡

金剛山の東斜面（奥迫）に古墳があった。この地を大学の教授が調査したことがあり、その後この地の土を取っていた際、黒ずんだ竈（かまど）の跡があった。また石斧（おの）や、壺形土器の破片などが発見され、頸部に凸帯を付けた特殊な形をした壺形土器も発見されている。

花畠練兵場跡

明治維新前、徳山藩主の別荘があり、お姫様が住んでおられた。花が好きなので広い花畠があったが、洋式操練の必要から、献功隊の練兵場にされた。